

琉球大学学術リポジトリ

戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇連合沖縄救済会

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2008-02-13 キーワード (Ja): 戦後, 回復, 救済会, 豚 キーワード (En): postwar, recovery, relief society 作成者: 吉田, 茂, Yoshida, Shigeru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/3571

戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇連合沖縄救済会

吉田 茂

琉球大学名誉教授

Recovery of Okinawa Livestock in the Early Years of Postwar and the Hawaii Union of Okinawa Relief Society

Shigeru YOSHIDA

Professor Emeritus, University of the Ryukyus

Abstract: Okinawan emigrants to Hawaii not only contributed to increase the number of hogs in the early years of postwar sending Okinawa hogs as a present, but also improve Okinawa's agriculture and diet.

Hogs from Hawaii gave a power to recovery of postwar Okinawan.

Hogs from Hawaii sparked off for spreading and increasing postwar's Okinawa hogs.

Hogs from Hawaii contributed to the breed improvement of Okinawan hogs.

The farm land which ruined by war was improved by using excrement and urine because of increased number of hogs.

In Okinawa, pork is very important food materials for daily diet and traditional events. And lard is used almost all cooking. By increasing the number of hogs, the production of pork and lard increased and improved postwar's Okinawan diet.

キーワード：戦後、回復、救済会、豚

Key words: postwar, recovery, relief society

緒 言

戦前の沖縄の養豚

沖縄においては、豚は自給動物蛋白源、厩肥源として古くから多くの農家で飼養されていた。本文で紹介するように昭和戦前期までは豚は全国一の飼養頭数を誇っていた。そして、豚は農家の副業として、主たる耕種作目を補完するために導入されており、専業として飼養していた農家は非常に少なかった。豚は、農家以外にも、泡盛製造業や豆腐製造業で副業として、酒かす並びに豆腐かすを利用して飼養されていた。

第二次世界大戦によって豚の飼養頭数が激減した。戦後の家畜増殖についてはアメリカ軍をはじめ住民等により、あらゆる努力がはらわれた。ここでは終戦後初期の社会がまだ混乱状態から抜けきらないでいるさなかで、沖縄の戦後復興の一助ともなればとの思いから沖縄への豚寄贈に取り組まれた布哇連合沖縄救済会の取り組みを総合的にまとめ、沖縄の戦後復興と豚の増殖に同救済会がいかに貢献したかを分析した。

松尾幹之¹⁾によると、わが国における養豚導入は沖縄が最も早かったようである。すなわち、豚肉の利用は徳川期まではわが国では見られなかったが、長崎出島にいた中国人、オランダ人の需要に応じて、長崎で局部的に豚が飼養されていたとも言われる。ところが、沖縄では、徳川期すでに中国渡来の黒豚が飼養されていた。明治になって、これが奄美大島に広がり、やがて鹿児島本土で飼養されはじめた。

沖縄に養豚が導入されるきっかけは、1372年に至り中国と国交が開かれるようになり、中国文化の導入と同時に食生活の導入がなされたためだといわれている。慶留間知徳²⁾は中国養豚の沖縄への伝播について、「弘和3(1383)年頃、天願太郎按司は数回、明国へ(進貢使として)遣わされていたが何時か帰藩の時、豚種を持ち来たりて人民に配り、其の飼養と繁殖方を計り、食用に供したりしなり、それより沖縄にて養豚せし始めである。」と述べている。

豚の飼養頭数から判断すると、沖縄の養豚は、戦前期(明治期、大正期、昭和戦前期)を通じて、常に全国一であった。

表1. 戦前期養豚農家率.
(沖縄, 全国: 1926, 30, 35, 40年)

単位: 戸, 頭, %

年次	項目	沖縄	全国
1926	農家戸数 (A) 戸	85,881	5,555,157
	飼養農家 (B) 戸	76,655	352,604
	飼養頭数 (C) 頭	115,426	621,466
	養豚農家率 (B/A) %	89.3	6.4
	1戸当たり飼養頭数 (C/B) 頭	1.5	1.8
1930	農家戸数 (A) 戸	88,184	5,599,670
	飼養農家 (B) 戸	80,634	405,001
	飼養頭数 (C) 頭	120,499	742,311
	養豚農家率 (B/A) %	91.4	7.2
	1戸当たり飼養頭数 (C/B) 頭	1.5	1.8
1935	農家戸数 (A) 戸	92,332	5,610,607
	飼養農家 (B) 戸	83,044	573,133
	飼養頭数 (C) 頭	128,823	1,063,138
	養豚農家率 (B/A) %	89.9	10.2
	1戸当たり飼養頭数 (C/B) 頭	1.6	1.9
1940	農家戸数 (A) 戸	89,357	5,479,571
	飼養農家 (B) 戸	83,026	453,105
	飼養頭数 (C) 頭	128,793	797,830
	養豚農家率 (B/A) %	92.9	8.3
	1戸当たり飼養頭数 (C/B) 頭	1.6	1.8

資料: 農林省『農林省統計表』各年より作成.

1902 (明治 35) 年には全国の飼養頭数の約 49%, 1921 (大正 10) 年には同約 16%, 1940 (昭和 15) 年には同 16%であった.

戦前沖縄の豚飼養頭数が全国一であったという特徴以外に, 沖縄の養豚の特徴を示したのが表 1 である. 総農家のうち豚を飼養していた農家の割合を示す養豚農家率が沖縄は非常に高い. 1940 (昭和 15) 年を例にとると沖縄は約 93%, 全国では約 8%であったにすぎなかった. 沖縄では 100 戸の農家のうち何らかの形で豚を農業経営に取り入れていた農家が 93 戸あったことになる. 全国では 8 戸でしかなかった. とところが, 沖縄の農家 1 戸当たりの飼養頭数は少なく, 1926 (昭和元) 年, 1930 (昭和 5) 年に 1.5 頭, 1935 (昭和 10) 年, 1940 (昭和 15) 年に 1.6 頭であった. 全国では同期に 1.8-1.9 頭であった. 沖縄では養豚農家 1 戸当たりの飼養規模は小さいが, 飼養農家数が多いので県全体としての飼養頭数は多く, 全国一の養豚県となっていたのである.

明治期, 大正期, 昭和戦前期を通して, 飼養頭数の最高を記録したのは 1938 (昭和 13) 年の 141,494 頭であった.

戦後の沖縄の養豚

はじめに, 戦争中の沖縄の家畜の状況について明らかにしておこう.

比嘉善雄は 1936 (昭和 11) 年にアメリカのロサンゼルス神学校を卒業し, 開戦前に沖縄へ帰っていた. 比嘉は終戦間際に米軍が上陸し, 掃討作戦を展開中に米軍から, 羽地村の古我地と我部祖河の責任者に任命された. 戦後, 沖縄群島政

府で志喜屋知事の専属秘書, 公式主席通訳官, 比嘉秀平・当間重剛両主席の下で, 駐日代表東京事務所所長, 等を勤めた. そして, オランダのアムステルダムで開催された第 1 回世界キリスト教協議会 (1948 年) に出席した. その際, ハワイ・ロサンゼルスに立ち寄り, 沖縄への豚寄贈・輸送で中心的な役割を果たした山城獣医やララ³⁾ のボールズ博士等とも懇談している. 比嘉は著書「わたしの戦後秘話」⁴⁾ の中で, 終戦間際の沖縄本島における家畜の飼養状況について興味深く述べているので, 紹介しよう. 「戦闘が始まると人々は避難し, 家畜の面倒を見るものはいない. もっとも避難するとき殺して食べてしまったり, 小さな鶏などは一緒に避難小屋まで持って行ったりもしたのだろうが, それでも, 豚や山羊や鶏が逃げ回っているのが見られる. それを見つけた人たちが捕まえてきては食べる. その有様を見ていると, 幾日も経たぬうちに, 沖縄中から家畜という家畜が姿を消すかもしれない, と考えた.」「このまま戦争が続くと, そのうちに食糧が全部なくなってしまう. 手当たり次第に家畜を殺して食べている有様を見ていたわたしは, 山の避難小屋の近くに飼っていて, 連れ帰った豚, 山羊, 鶏の繁殖に努めなければならぬと思った.」「既に, 田井等あたりでは, 避難民たちがアメリカ軍の保護の下で生活していて, 誰のものともわからぬ家畜を一箇所に集めて獣医が管理していると聞いた. そして, ここもそのうちにアメリカ軍から強制的に供出させられるに違いないから, 今のうちに食べてしまったほうが良い. 盗まれたりしたら元も子もないではないか, と家族のものは主張したが, わたしは取り合わなかった.」「後日, 本当に供出命令が来たが, 供出しようにも豚はいなくなっていた. わたしは屠殺し

て食べてしまうことには反対だったから、家人が、わたしの知らぬ間に片付けてしまったらしい。今日只今の空腹をどう満たすかが大問題だったようだ。鶏もそうしたが、うまく行かなかった。戦争という大きな試練を受けている最中だから、将来を憂うより、今の欲求を満足させようとする刹那主義に走るのも止むを得ないことではあった。」

比嘉が述べているように、辛うじて住民の手元に残っていた家畜や住民の手元を離れてさまよっていた家畜をかき集めて終戦直後の沖縄における残存家畜数が推計されている(表2)。この推計数は、後に述べる農林水産省の統計には記録されていない。

離島に比べてより戦闘の激しかった沖縄本島の家畜の被害がいかに甚大であったかが伺える。

沖縄民政府(沖縄群島地区)では、戦争による家畜の被害状況が地域によって異なっていることから、家畜の増殖にあたっては地域により不公平が生じないようにするために、1946年10月3日に「家畜移動に関する通牒」を各市町村に発して、計画的な移動によって全地域がバランスよく増殖可能な施策を講じた。その通牒の内容は次のようなものであった。⁵⁾

- 1) 牛、馬、豚、山羊は左に掲ぐる場合を除くの外これが移動を禁ず
 - ①知事において増殖計画に必要とする場合
 - ②特別な事情により農務部長の承認を受けた場合
 - ③沖縄農業協同組合連合会の斡旋による場合
 - ④市町村農業組合の斡旋による場合
- 2) 市町村における移動は其の農業組合の斡旋の場合に限る
- 3) 市町村間並びに沖縄地区外の輸移入は沖縄農業協同組合連合会の斡旋する場合に限る
- 4) 第2, 第3項による場合は其の都度農務部長宛報告するものとする

上記の施策によって、増殖における地域間のバランスがほぼ達成されたと判断した沖縄民政府は、1948年6月10日に家畜移動取締を解除し、馬の移入を除いてすべての家畜の移動を自由にした。

なお、宮古群島、八重山群島においても、沖縄群島と同様に増殖のための諸施策がとられた。例えば、八重山民政府は、豚の屠殺頭数を制限するとともに、豚の群外搬出を禁止することによって、群島内の豚の増殖を図っていた。1946年頃は豚の増殖を早めるために、各地域で牝豚の屠殺を禁止する措置がとられた。

農林水産省による、戦後の沖縄の豚の記録は1946年から

記録されている。それによると、1946(昭和21)年には終戦直後の約7倍(14,064頭、全国の約16%)にまで回復した。そして、1956(昭和31)年に戦前の最高飼養頭数(1938(昭和13)年の141,494頭)を上回った。1989(平成元)年には戦後の最高飼養頭数(338,200頭、全国の約2.9%)を記録した。現在(2002(平成14)年)の飼養頭数は291,900頭で、全国の約3%である。

このように、戦後の沖縄における豚の飼養頭数の回復が急速に進んだのは戦禍を免れた2,050頭の豚とアメリカ軍当局の計らいでアメリカから輸入された45頭の豚、布哇連合沖縄救済会から贈られた536頭の豚、ララから贈られた豚、群島政府ごと実施された家畜増殖のための諸施策等が、総合的に功を奏したことにある。

アメリカ軍政府と戦後の豚の増殖とのかかわり

第二次世界大戦の最後の、そして最大の激戦地となった沖縄は、1945(昭和20)年6月頃、アメリカ軍の制圧の下に終戦状態を迎えた。アメリカ軍は1945年6月から1946(昭和21)年7月までは海軍が、1946年7月から1950(昭和25)年12月までは陸軍、そして1950年12月から復帰の年、1972(昭和47)年5月までは、琉球列島米国民政府が、それぞれ沖縄を統治していた。

ここでは、アメリカ軍政府時代の沖縄における豚の増殖とのかかわりを述べることにする。

1. キャトリン軍政府農務部長の業績

キャトリン農務部長は終戦直後の沖縄における畜産の壊滅的な現状を目のあたりにして、「東洋の畜産の改良は沖縄より」とのモットーを掲げ、単身、徳之島、沖永良部、喜界島を視察し、家畜移入の具体的方策を樹立した。畜産のみならず農業全般に大きな業績を残したことについては、比嘉永元(沖縄民政府農務部長)や日越国吉(沖縄民政府畜産課長)が「戦後農林水産業十年の歩み」⁶⁾や「沖縄の証言上」⁷⁾で述べている。

沖縄本島の家畜の増殖は島内生産による補充では困難な状況にあったので、キャトリン農務部長の計らいで、割に被害の少なかった離島、宮古、大島方面より琉球農業協同組合連合会(琉球農連)をして移入せしめ、その増殖を図った。

当時、琉球農連がかかわった豚、山羊の移入について、琉球農連五十年史⁸⁾は次のように記述している。

「久米島からは1946年9月下旬に民政府畜産課と(琉球)

表2. 終戦直後の沖縄における残存家畜の推計.

単位：頭

	牛	馬	豚	山羊
沖縄本島	50	700	850	1,500
離島	400	530	1,200	1,300
計	450	1,230	2,050	2,800

資料：「沖縄大観」, P 86, 沖縄朝日新聞社編集, 日本通信社発行, 1953年4月4日.

農連の永富技師の調査に基づいて仔豚94頭が初めて移入された。宮古地区からの移入は1947年3月に(沖縄)民政府日越国吉畜産課長、(琉球)農連伊礼正幸理事と永富一夫技師が宮古民政府に交渉し5月5日に仔豚、中豚200頭、山羊137頭を移入したのが初回であった。静岡県からは1947年に豚のパークシャー種を初輸入した。」

1946年4月から1949年3月までの間に沖縄本島が大島、離島から輸・移入した家畜の頭数は表3の通りである。

2. アメリカ軍政府による豚の輸入

戦後初めて沖縄に輸入された豚は、アメリカ軍政府が1946年にアメリカから輸入した豚であった。

品種はパークシャー種とハンブシャー種の2種類で牝30頭、牡15頭の45頭であった。これらの豚は、各農事試験場で飼育し、これらの豚から生産された仔豚は各市町村に配付し、各地域の豚増殖の基礎をつくった。⁹⁾

布哇連合沖縄救済会による沖縄への豚の寄贈運動

1. 豚の寄贈運動のきっかけと開始

ハワイにおいては、沖縄の戦後復興のための救済組織として、次のような組織が活動した。沖縄衣類救済会(1945年10月に組織)、レプタ会(1946年7月に組織)、沖縄救済更正会(1947年2月に組織)、布哇連合沖縄救済会(1947年12月に組織)、沖縄医療救済連盟(1948年1月に組織)、沖縄復興布哇基督教後援会(1948年11月に組織)。その他にハワイ島沖縄救済会、マウイ島沖縄救済会、カウアイ島沖縄難民救済会、等も組織され、それぞれ活動していた。

布哇連合沖縄救済会は沖縄県民への豚の寄贈を目的として組織された。

同救済会が結成される経緯について、仲嶺真助¹⁰⁾の自伝から引用して紹介しよう。

「嘉数(亀助)さんが豚贈りを考えるようになったきっかけは、金城善助ドクター、儀間真福ドクター、天願保永ドクター、宮里昇平氏などと共に委員会を作り、沖縄の人たちが暖かく冬を過ごせるように衣類集めをしたことにあるのではないのでしょうか。」「嘉数さんは面白い人で、(共同)金融会社の仕事が終わると、急いで家に帰り着替えをして、豚飼いに精を出していたのです。勉強は好きでしたから、金融業のことや財政学の勉強はもちろん続けましたが、養豚についても、学術雑誌、専門書などを克明に読んでいました。そうした勉強が実を結び、夫人に手伝わせての養豚業でしたが、いつの間にかハワイ随一の専門家になっていました。ハワイの養豚業者で、一番最初に販売飼料を使い始めたのは、嘉数さんだといわれています。

その頃、沖縄系の人々がハワイの養豚業者の主体になっていました。(共同)金融会社に(お金を)借りに来る人の中にも多くの養豚業者がいました。嘉数さんは、実に多くの養豚業者に、豚の種類、飼料、病気対策などで、手助けや指導をしていました。」

「戦後間もない頃ですが、ハワイから沖縄へ豚を550頭贈ったことがあります。そのことについて、下嶋哲朗¹¹⁾さんが琉球新報の連載で丁寧に書いてくれ、経過はそれを読めばわかりますが、私としては、もっと嘉数さんのことを書いてほしかったと思います。」

『その豚の話は、本当のところ、嘉数さんの「頭の中」というか、「胸の中」で作り上げられたものでした。』

『当時、豚1頭60ドルでした。「豚を贈ろう」と呼びかけが始まり、共同金融会社のオフィスは総本部となり、嘉数さんを中心にみなで駆け回りました。』

沖縄への豚輸送時の付添い人の一人として重要な役割を果たした安慶名良信¹²⁾もその著書「私の微かな力」の中で嘉数について記述してある文章があるので、それも紹介しておこう。

『沖縄の復興は「経済から」との幹部諸氏の不動の信念が、こんにちの(豚輸送)大成功への第一歩だったと信ずる。幹部諸氏の中でも、最有力者であり、知恵の鍵を握っていた人は、共同金融会社の嘉数亀助氏、そして当時の会長金城善助ドクター、……だと思ふ。』

「嘉数氏の考えでは沖縄人は豚飼いに経験がある、又沖縄には油が必要である、その上農家には肥やしが絶対必要であるという見地から豚輸送を決定したのである。」

以上のことから、当初衣類を沖縄へ贈る運動を展開していた、嘉数、金城、などが沖縄の戦後復興のためには豚を贈ることが最適だと判断し、有志に相談を持ちかけ、1947年12月18日に沖縄へ豚を贈る組織の創立総会を慈光園(ホノルル市内)にて開催し、組織の名称を布哇連合沖縄救済会と決定した。このことをハワイ州全域に在住する沖縄系の人々に広く周知徹底をすべく、30日に2邦字新聞(Hawaii TimesとThe Hawaii Herald)に布哇連合沖縄救済会の名のもとに、「沖縄の畜産復興に豚は食料、食用油、肥料問題解決に多大の貢献をなすものと信じます。久しく話題になっていた550頭の豚輸送問題は愈々実行に移すべく布哇連合沖縄救済会を設立、顧問、理事、役員は左のごとく常に県人会のために活動せられし有志を網羅し発表することを得ました」という文言をつけて、「役員発表謹告」というタイトルで広告を出し沖縄系の人々に広く協力の呼びかけをした。

なお、役員のうち会長には金城善助ドクター、会長補佐役の副会長嘉数亀助、副会長(各町村人連絡係)仲嶺真助、などが名を連ねている。

2. 募金活動の展開

1947年12月18日に布哇連合沖縄救済会が正式に承認されると、直ちに募金活動を、各島の各町村会等を通じて活発に展開した。豚1頭の購入費を60ドルと設定し、募金を募った。「移民は生きる」(編著者比嘉太郎)¹³⁾には未使用の番号3981の領収証(和文と英文の両方が併記された)は載っているが、実際に使用された領収証は明らかにされていなかった。ところが、2003年7月に、たまたま世界ウチナーンチュ・ビジネスアソシエーションの創設者であるロバート仲宗根氏の父親宅(ホノルル市)に保管されていた領収証を同氏の

表3. 沖縄本島が輸入・移入した家畜の頭数.
(1946年4月～1949年3月)

単位：頭

	牛	馬	豚	山羊
大島	1,853	86	839	1,490
宮古	-	184	2,745	578
久米島	29	12	1,330	605
伊平屋	-	1	-	-
伊是名	1	1	234	-
大東	-	-	112	89
渡名喜	9	-	213	-
計	1,892	284	5,473	2,762

資料：「戦後 農林水産10年の歩み」P 42, 源武雄編集, 社団法人琉球農林協会発行1955年7月1日.

兄が見つけた。¹⁴⁾ その領収証の番号が3であることから、募金開始後すぐに寄付したものと見られる。日付は1948年1月27日、寄付者は仲宗根松郎氏（ロバート仲宗根氏の父）、受取人は布哇連合沖縄救済会の理事長山城松十となっている。豚1頭、60ドルの領収証となっている。

当時、ハワイには550頭の豚をまとめて沖縄へ贈るだけの余裕がなく、沖縄へ贈る豚はアメリカ本土で、豚仲買人（アッド・ローセ氏）に依頼して調達することになった。

布哇連合沖縄救済会は所期の目的（沖縄へ豚を贈ること）を達成したので、9月15日付で収支決算報告書を作成し、10月23日と25日の新聞¹⁵⁾を通して寄付者に知らせた。それによると、総収入が50,680ドル67セント、総支出が44,661ドル68セント、残金が6,018ドル99セントであった。なお、豚550頭の購入代金が38,903ドル05セントであったので、1頭あたりおよそ71ドルかかったことになる。当初予定していた60ドルよりおよそ11ドル高かったが、寄付金が予想を上回って集まったので、目標の550頭の豚を購入することができた。

3. 豚輸送作戦と付添い人の選定

戦後間もないこともあって、この豚輸送作戦にはアメリカ軍の協力が必要であった。当初アメリカ陸軍はサンフランシスコから沖縄へ豚を輸送する許可を与えていた。豚輸送の付添い人として、養豚に関係の深い役員の中から、最適者として、次の6氏が選ばれた。山城善雄（獣医、内外連絡係担当副会長）、渡名喜元美（ハワイ大出身で農学士、養豚知識を有する、内外連絡係）、安慶名良信（ホノルル・カフェー経営者、5、6年の養豚の経験がある、理事）、仲間牛吉（豚肉店経営者、理事）、そして、島袋真栄（養豚場経営者、理事）。アメリカ本土での豚購入交渉のために山城が他の5人より先にサンフランシスコ入りした。

陸軍の船舶の都合により、沖縄への豚の輸送はサンフランシスコからオレゴン州のポートランド港に変更され、陸軍から獣医と運輸専門の兵士がポートランド港に派遣され、出発前の豚の健康状態の診察や積み込み作業について指導がなされた。豚はU・S・S ジョン・オーエン号に積み込まれ8月31日午後6時に沖縄向け出港した。

布哇連合沖縄救済会により沖縄への豚輸送付添い人として選定されたのはすでに述べた6氏であり、盛大な壮行会の後、サンフランシスコへと出発した。ところが、沖縄へ向け出発したU・S・S ジョン・オーエン号には7人乗り込んでいた。ハワイ州において新進気鋭の養鶏業者であった上江洲安雄は、ハワイ州の邦字新聞によるとアメリカ本土に雛の仕入れに行っていて、たまたまた6人に会い、合流して沖縄への豚輸送にかかわるようになったとある。また、安慶名はすでに紹介した著書の中で“軍部と交渉中、幸いに上江洲君がやってきたので、6人では無理だからといって上江洲君にも加わってもらった”と回顧している。ところが、下嶋はすでに紹介した著書の中で、現在となっては豚輸送付添い人7名のうちただ一人の生存者である上江洲に面接し、聞き取りにより、上江洲は当時若く役員に名前を連ねていなかったが、故郷沖縄への思いは強くぜひ付添い人として沖縄へ行きたいと切望していたようである。そこで、雛の購入などを名目にして、ひそかにサンフランシスコに渡り、6人の付添い人と合流し、若さを強調し一行に加えてもらって沖縄行きが実現したエピソードを紹介している。

4. 豚輸送後の配付方法と飼養管理指導

U・S・S ジョン・オーエン号は9月28日に勝連のホワイトビーチに入港し直ちに豚は陸揚げされ、那覇市古波蔵にあった家畜検疫所に収容され、配付されることになった。

輸送中の事故、疾病などにより、配付の対象となった豚は536頭であった。品種はパークシャー、チェスターホワイト、ポーランドチャイナ、スポッテッドポーランドチャイナ、ヘレホード、ハンプシャー、ジューロックジャーザー、の7種類であった。これらの品種はすでに述べたアメリカ軍により輸入されたパークシャーとハンプシャーとともに戦後の沖縄における豚の品種改良に大きな貢献をなした。

布哇連合沖縄救済会の中心メンバーであった嘉数を中心にして養豚経験者により纏め上げられた豚の配給方法は、沖縄の行政当局が実施した豚の配給方法に生かされている。

郷土再建のために沖縄全戸に豚が行き渡ることを願い、豚の配給方法、並びに飼育について7項目にまとめて、実施するよう提示した。ここでは、そのうち主要な項目を紹介して

おく。

①550頭の牝豚と牝豚の割合に応じた種豚を県下の各市町村の現在の人口に割り当てて公平に分配すること（但し種豚は市町村の所有とする）。

②牝豚の割り当てを受けた市町村は、地元の有能な篤農家に1匹宛無料で分配する。

③最初の牝豚の配給を受けた人は、その豚をよく飼育し、子を産ませ、生まれた仔豚の中から将来親に適すると思う牝の仔豚を次の有能な篤農家へ無料で与えること。そしてこの仔豚の配給を受けた人たちはまた、これを育てて親となし、仔豚が生まれたら次の人へ与えること。（但し他に与える仔豚の数は最初の配給を受けた人は10匹とし、2度目以下の人は5匹を他へ可及的に配給すること）

④1頭の配給を受けた人は、事情のいかんを問わず再度豚の配給を受ける資格なき者とする。

ハワイの同胞から贈られた豚は沖縄の軍民両政府の関係部とハワイ代表の間で種々協議の結果、救済会から提示された配付方法を参考にして、各市町村の他に病院関係、与儀試験場、名護試験場、大島、宮古、八重山に配給した。具体的な配給は、1) 原則として各市町村の農家戸数を基準にして行われた。2) 牝豚の割り当てを受けた市町村は有能な農家に1匹ずつ無料で配付した。3) 配給を受けた者は生まれた仔豚の中から親豚に適する牝仔豚を6匹、次ぎの有能な農家に無料で与え、これを受けた者もまた牝仔豚を次ぎの者に（2度目以降は2匹ずつ）無料で与え、次々に繁殖させて1戸1頭にまで到達せしめる計画で、この分配責任を果たしたら親豚は完全に飼育者の所有となる。

救済会が提示した豚の配分方法はその後、ララから送られた豚の配分にも応用され、戦後の沖縄における豚増殖に貢献することとなった。

む す び

終戦直後、布哇連合沖縄救済会から沖縄住民へ贈られた豚は、戦後の豚の増殖に貢献しただけではなく、農業、食生活に次のような影響を与えた。

- 1) 荒廃の中に佇む沖縄の人々に、復興への力強い光を与えた。
- 2) 戦後の豚の普及、増殖の誘い水としての重要な役割を果たした。
- 3) 品種改良に大きな役割を果たした。
- 4) 養豚農家が増え、糞尿を利用した耕種作物の栽培により、戦争により荒れていた土地の改良が進むことになった。
- 5) 沖縄においては豚肉は日常の食生活、諸行事の重要な食

材であり、又ラードはあらゆる料理に使用されることから、豚の飼養頭数が増えることにより、豚肉、ラードの生産が増え、戦後の食生活、諸行事に回復の兆しが見えるようになった。

文 献

- 1) 松尾幹之. 1968. 畜産経済論, 御茶の水書房, P174.
- 2) 慶留間知徳. 1962. 琉球千草之巻 再版慶留間勇, P97.
- 3) ララというのはスキップ (連合国最高司令官) 管下の救済事業をなすために認可された私設の救済機関を統合した団体である (琉球政府文教局, 『琉球史料 第五集』, 1959年, P89.
- 4) 比嘉善雄. 1978. わたしの戦後秘話, 琉球文教図書株式会社.
- 5) 琉球農業協同組合連合会『琉球農連五十年史』1967年, 48-351.
- 6) 源武雄編集. 1955. 戦後 農林水産業十年の歩み, 社団法人琉球農林協会発行, P1-2.
- 7) 山里景春. 1971. 沖縄の証言 上, 沖縄タイムス社, P 244-245.
- 8) 琉球農業協同組合連合会『琉球農連五十年史』1967年, P349-350.
- 9) 源武雄編集. 1955. 戦後 農林水産業十年の歩み, 社団法人琉球農林協会発行, 46.
- 10) 仲嶺真助. 2002. 仲嶺真助 自伝~沖縄系帰米二世九十年の生涯を顧みて, 新報出版, 73-78.
- 11) 下嶋哲朗は琉球新報 1994年5月9日~1995年1月9日に『豚, 太平洋を渡る~沖縄をすくったハワイの人々~』と題して連載を載せた. 後日 (1997年), この連載に手を加えて未来社から『豚と沖縄独立』というタイトルで単行本として出版した. この単行本では, 沖縄への豚輸送について, IV沖縄を救え, V豚の太平洋横断, VI見果てぬ夢, にまとめている.
- 12) 安慶名良信. 1963. 私の微かな力, 66頁.
- 13) 比嘉太郎編著. 1974. 移民は生きる, 日米時報社, 207-209頁.
- 14) 2003年7月19日の琉球新報に『戦後沖縄救った「豚輸送」, 募金の領収証見つかる~ハワイ ロバート仲宗根さん父宅で~』というタイトルで, 領収証の紹介記事が出ている.
- 15) 1948年10月23日付 Hawaii Times, 10月25日付 The Hawaii Herald.